

オラリオにモンスター
ハンターが駐在してい
るのは間違っているだ
ろうか

クルミ割りフレンズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オラリオ駐在のハンターの狩猟ライフ。

目次

設定

設定とか色々

1

本編

プロローグ

7

かくも血塗れウサギかな

11

たんと食え『豊穡の女主人』

19

設定

設定とか色々

世界観

ダンまち方面は基本的に原作と同じか近いがモンハン方面が絡んできた場合ずれて行く可能性がある。

ダンまち世界とモンハン世界が合体した世界観で地上には地上の、ダンジョンにはダンジョンのモンスターが生息している。

地上のモンスターを狩猟するのがハンターでダンジョンのモンスターを相手取るのが冒険者と言う風に認識されている。

モンスターハンター

地上のモンスター（リオレウス等）たちを狩猟する事を生業とする狩人たちの事。通称ハンター。

数が増え過ぎたモンスターを討伐したり、モンスターの脅威を撤廃するためにモンスターを狩猟し、人類という生物の繁栄を目指すと共に自然との調和を図ったりするため

の専門職。あくまでも強大な自然と人類との調停者の存在。決してモンスターの殲滅を目的とする職ではない。

狩り過ぎたり、不当に狩猟すれば所属しているハンターズギルドから注意勧告が来る。それを破り続けるとハンターライセンス剥奪や最悪ギルドに所属する対ハンター専用ハンターとも呼ばれるギルドナイトより肅清対象に選ばれる。

全ての人間・亜人種が成れる職では無く、その中でも特別な才能を持って生まれた超人のみが成れる。例としては

・ 断崖絶壁から転落する↓足が痺れる程度または数秒意識を失う程度で済み、怪我一つ負わない

・ 草食種のモンスターから毎回均一の肉をはぎ取る技術

・ 極寒や灼熱の地においてもドリנק一つで完全適応

・ 落雷や火球、隕石や大地を両断するような流水を食らっても意識を失うだけで欠損一つ起こさない鋼の肉体

・ 自身の数十倍の大きさの獲物を吊り上げる剛腕

・ 命に関わる猛毒やモンスターを狂暴化させた挙句衰弱死させる致死性の感染症を薬も使わず数秒〜数分で治癒し、走っただけで出血するほどの酷い裂傷もしゃがんだり肉を食べるだけで治してしまう治癒能力

・刃こぼれした武器でも砥石で数回擦るだけで斬れ味を大幅に回復させ、何度研いでも武器がすり減ってなくなる職人顔負けの研磨技術

等々、これは単に一例であるがこれだけでも本当に人か疑わしい程の身体能力を有する。が記憶力はそこまで高くないのか何度も調査した事があるような回復薬などでも調査書やスキルが無ければ100%な作成を行えない。

これは一種の加護によるものと考えられており、その弊害か神の恩恵を刻むことが出来ないという特性を共通して持っている。その加護もまとめて言うなら地上のモンスター特攻と呼べる代物。

一級冒険者でも地上のモンスターを相手取る場合勝っても上位中盤のモンスターまでと言われており、G級ともなれば完全な災害レベルと言われる。これは神の恩恵が弱いのでは無く単純に相性の問題でありハンターもダンジョンのモンスター相手にしても勝って深層序盤とされている。

ランクに下位・上位・G級と別れており、下位で駆け出し・中堅。上位でプロハンターと呼ばれ大抵のハンターはここまで。G級ともなれば頭おかしいレベルの強さを誇り上位ハンターたちの中でも一握りが昇格できる。しかし強さはお墨付きで重要な国家や都市には大体一人が常駐している。

そんなハンターではあるが毎年数名が亡くなっており、危険な職である事は間違いな

い。

モンスター

ここでは地上性つまりモンハン世界のモンスターたち。

ハンターの狩猟対象となる生物。大きさでは無く種の強さによって小型・中型・大型・超大型と区分されている。種ではなく個の強さによる区分を下位・上位・G級とランク付けされている。

G級で大型ともなれば災害レベルとも言われて畏怖されている。超大型ならば国家崩壊・世界終焉レベルであり、これ一人で退けるあたりハンターはやはり頭おかしい。あくまでも彼らは自然界の脅威であり、人類根絶やしや悪意を持って襲い掛かってくる訳では無く好奇心や縄張りへの侵入など人類側に非がある事が多い。

リオレウスなどは有名どころでありハンターでなくとも名前ぐらいは知っている人は数多い。ダンジョンから進出したモンスターたちに対しては本能的に異物と認識し優先的に排除しようとする。代を重ねるごとに弱体化するダンジョンから進出したモンスターにとっては天敵とも言える為原作よりも彼らの数は少ない。

モンスターたちの中でも一際強大な存在である古龍種は自然の猛威の具現化、神話における神と言われ一部では古龍種を神と信仰する宗教も存在している。

討伐出来ると言われているが実際のところ本当に死亡しているのか怪しい存在ではあるが寿命がある事は分かっている。寿命を終える際に辺りに長年溜め込んだエネルギーを放出する。

デイビッド・フリリップス（21歳）

本作における主人公でありG級ハンターの一人。ドンドルマ出身。酒が大好き。

オトモに黒毛のアイルー『リコリス』を雇っている。

自身をG級ハンターの中では中堅だと認識しているがソロでラオシャンロンを討伐している辺り化物レベル。彼より強いハンターも勿論存在しており、化物の上には化物が居たという話。

モンスターに対しては一定の敬意をもって狩猟を行っている。この考え方は食事をする際の『いただきます。』と似たようなもの。

酒が好きであり狩猟を行った日はよく呑んでいる。

剣士武器しか真面に扱えない為剣士キラーとされているモンスターは割りと苦手としている。ドンドルマにて知り合った筆頭ガンナーからはガンナーとしてのセンスは0と言われ開き直っている。得意武器はエリアル×大剣・スラッシュアックス。

一時期炭鉱夫になっていた時期があり不眠不休で護石を採掘していた。筆頭ルー

キーと共にクエストに行った時に隣でどんどんレア素材や神おまを当てた彼に対して割りと嫉妬した。

あまり設定が固まっていない為随時更新。

オラリオにおける上級ファミリアのいくつかは紆余曲折あつて知り合いになった。

リコリス

ディビッドのオトモアイルー。通称リコ。

黒毛に青い瞳の巻き尻尾。出稼ぎの為にこの業界に入りディビッドに雇われた。非常にモフモフ

プロオトモでありプロニャンターでありそのブーメラン捌きは目を見張るほど。モフモフ

因みに男性である為「かわいい」などと言われると若干ムツつとする。年齢はネコで言えば爺さん、人間に換算すると青年。

魚介が好物ではあるがオストガロアを見てからはイカが苦手になった。

一部のキャットピープルに対しては鼻の下を伸ばすなど割とおっさんっぽい。強い女性が好みでもある。

本編

プロローグ

“ 迷宮都市オラリオ ”

ダンジョンと呼ばれる地下迷宮の上に築き上げられた文字通りの迷宮都市。それでもって数多くの神と人間・亜人種が暮らしているこの都市には夢を持って日夜ダンジョンに潜る冒険者たちがいる。

地位や名誉、一攫千金に運命的な出会い e t c . . . まあ兎に角抱いてる夢は人それぞれだ。冒険者になるには神が運営する《ファミリア》に入り眷属にならなくてはいけないらしいが俺には関係ないね。

冒険者たちは基本的にダンジョンに潜り、ダンジョンから生まれるモンスターを狩る事で生計を立てているみたいだが奇しくもその在り方は俺達と近いモノがある。

ならお前は何なのかって？俺はハンターズギルド所属のモンスターハンター、ディビッド・フリリップス。此処オラリオに駐在し“地上”のモンスター共を狩猟する事を生業としているG級ハンターでこの物語の主人公的なアレだ、何？メタい？気にすんないよ。

この世界でモンスターと呼ばれる存在は大きく二つに分けられる。一つはダンジョンから生まれ落ちるモンスター、これは遙か昔に地上に進出した奴らも含まれており俺達ハンターにとっては専門外だ。そして問題は二つ目の方、元から地上に住んでいたモンスターで有名処だとリオレウスとかイヤンクックとかだな。どちらも姿形は種によつて様々だが前者は体内の何処かに魔石と呼ばれる弱点となる核を持っている。後者の方は魔石まんしもの持ちじゃない。稀に体内で希少な鉱石なんかを生成している奴はいるがな。ダンジョンのモンスターは魔石を砕かれ死ぬと黒い灰になって消滅するが地上のモンスターは死体が残る。分かりやすい違いはこんなモンだろ。

そしてそんな地上のモンスターを専門的に狩猟するのが俺達モンスターハンターつて訳だな。

俺がオラリオに駐在してるのは数年前に冒険者ギルドから直々に俺が所属しているハンターズギルドに要請があったからだ。別に仲が悪かった訳でもないんだがそれまで何となく相互不可侵みたいな状態だったから驚いたもんだ。

何でも度々地上性のモンスターが近くをうろついては何かしらの被害があった様でその度に冒険者たちが対処してたらしいが段々と手に負えない奴らも出始めたらしい。それでハンターズギルドからハンターを派遣して欲しいっていう要請があったんだ。まあ近くにラクシア王国アホなんざがあれば仕方が無いってものだ。

モンスターには下位・上位・G級と種では無くそれぞれの強さによってランク付けされていてそれら全てに対処できる様にG級ハンターである俺が派遣された様だ。因みにハンターランクは728だ。上にはもつと化物みたいな強さの奴らもいるから俺なんて中堅つてところだな。

「旦那さん、さつきから上の空でどうしたのニヤ？お腹が空いたならリユウノテールと特産キノコキムチがあつたですニヤ。」

こいつは俺の相棒オトモアイルーで名前はリコリス、通称リコだ。アイルーは大きめの猫が立ち上がったような姿をしている獣人族で近縁にメラルー何かがいる。亜人種デミ・ヒューマンにキヤツトピールがいるが関係性は不明だ。因みに名前の由来は尻尾が真っ黒で渦巻型で某不味い菓子を連想したからだ。

「何でもないよ、ちよいと昔の事を考えてただけだ。」

「ニヤ？あつ！そういえば旦那さん、ギルドから文が届いてたニヤ。コレですニヤ。」

「ありがと、えつと何だつて？これクエスト書じゃねえか。」

「内容は何ですニヤ？」

「2つのドスランポスの群れ合体してこつちに向かつて来てるからリーダー格のドスランポス2体を狩猟してくれだとき。ランクは上位だそうだ、適当に装備見繕つて出発するぞ。」

どうやら今日も今日とてオラリオは内も外も騒がしくなりそうだ。さてとお仕事お
仕事、終わったら達人ビールと洒落込みますか！

かくも血塗れウサギかな

此処はオラリオの外壁近く、デイビットがリコと共に居る。何故居るのかというところ

『GISYASYASYASYASYANN!!!』

『GISYA… GISYA…』

絶賛狩り中である。今回のクエストはゲネルセルタス亜種及びアルセルタス亜種の狩猟である。

オラリオに向かって来ているのが目撃され発注されたのである。

ゲネルセルタス亜種の方は尾と足が破壊されそろそろ限界に近い筈だがまだ戦意を喪失していない。

アルセルタス亜種の方はというと…

「ニヤー！ やっぱりボクあいつ嫌いニヤー！ 男として許せないニヤー！」

「まあな、あんな鬼嫁… いや虫嫁はゴメンだぜ。アルセルタスはまさか外壁に刺さったまま動かなくなるとはなあ。」

そうゲネルセルタスは原種も亜種もオスを武器として使うのである。更に亜種はそ

れに拍車がかかりその別名：砲甲虫の通りオスを弾丸としてプレスと共に発射する事があるのである。

しかも発射されたオスはその後何かに当たるとバラバラに砕け散るのである。しかし今回は発射した時には既に弱り切っていた事、撃つ瞬間口元にリコリスのブーメランを食らった事で威力が弱り外壁に激突しても砕けず刺さったようだ。まあその事を受けて虫の息なのだ…

「取り敢えずオスの方は虫…じゃなくて無視だ。ありやもう動けんだろうからな。」

「了解ニャ！行くニャ、ボクの必殺！メガブーメランの技、ニャー！」ぐるんぐるんぐるん

『G I S S Y A ! ? G I S S Y A S Y A S Y A N ! ? 』ズドンッ

リコリスの発動したメガブーメランの技を既に破壊され脆くなっていた脚に食らいバランスを崩してしまったゲネル亜種。そこにデイビッドがさかさず追撃する。

「ナイスだリコ！行くぜ、狩り技発動！」

今デイビッドが担いでいるのは大剣「真名ネブタジエセル」、デイビッドが最も得意な武器の一つ。その使い勝手の良さから今回も担いできたのだ。

剣が激しく火花を散らす程地面に擦り付け、振り上げると共に強力な衝撃波を起こす狩り技。

その名も

「地衝斬Ⅲ！オオオオオオ！！！」
ちしょうざん

『GISYAAAAAN！…』ドーン

狩技を真正面から受けた事でゲネル亜種はその巨体を地に沈めた。

しかしクエストはまだ終了していない。

「旦那さん、こっちはどうするニヤ？」

「ホント、どうしたもんかねえ。」

『GISYA… GISYA…』

そう先程から壁に刺さったままのアルセルタス亜種である。戦う力どころか戦意すら無く情けない鳴き声を上げている。

そもそもメスに呼ばれたから来て戦っていたのである。そのメスが死んでしまえば縄張りでもない此処では戦う理由もない。

「今回は捕獲してギルドに生息域の旧砂漠まで届けてもらうか。」

「了解だニヤ！」

そのまま壁から引き抜かれあっさり捕獲されたアルセルタス亜種はハンターズギルドに引き渡されたのだった。

「クエストを達成しました」

クエスト終了から暫くしてデイビッドはリコと共に街中を歩いてた。因みにデイビッドの今の装備はブラックXシリーズに真名ネブタジュセル、アイルーのリコを連れている為目立つ格好をしているが殆どの者は慣れていているようだ。

「旦那さん、これからどうするニヤ?」

「冒険者ギルドだ。着替えたかったが面倒だからこのまま行くぞ。」

「ニヤ、冒険者ギルドにニヤ?」

そう彼らは商店街エリアを進んでおりこのまま行くと冒険者ギルドに着くのだ。ハントーズギルドならば分かるが冒険者ギルドに行くことにリコは疑問に思ったのだ。

「そうだ、そう云えばリコはあんまり連れて行かなかったな。報告だよ、セルタス2体の事とアルセルタスが刺さって傷つけた壁の事もな。」

「討伐と捕獲に壁の修繕って事かニヤ?」

「そういうこつた、それをロイマン^デの野郎に報告すんのさ。」

「ニヤ、旦那さん口悪いニヤ。一応雇い主みたいなものニヤよ?」

日頃からぶつきらばうな物言いをしている主人が幾分かトゲ付きな為窘めるリコ。

それに対してデイビッドは顔を顰めて答える。

「そうは言うがな、あの野郎この前俺に『最近近づくモンスターが増えているようだが何

ならオラリオ周辺のモンスターを狩り尽くしてはどうだ？お主ならば可能だろう。』とか抜かしやがったんだぞ。それに俺を正式に雇ってんのはウラノス神だ。」

「ニヤ、それは確かに頭に来るのは分かるニヤ。でも仕方ないニヤよ、旦那さん。ボク達ハンターズギルドとオラリオの人達じゃあモンスターに対する考え方が違うのは当たり前前ってやつニヤ。」

ダンジョンのモンスターを否定する訳では無いが地上のモンスターは自分たちと同じく今を生き成長する動物なのだ。間違ってもダンジョンのモンスターの様に壁からポトポトと成長した姿で生み出される訳では無い。

地上のモンスターは大きく数を減らせば個体数が元に戻るまで数年かかる。それなのに邪魔になるから殲滅したらいいと言われたのだ。

オラリオにとってモンスターとは無限に湧いて来る存在なのだ。その事が彼らとの認識の違いなのだと痛感した。

「それは分かっている、けどな。ああもう、この話は終わりだ。ほらもう着くぞ、とにかくギルドの方には俺が報告しとく。その間リコはミイシャちゃんにでも可愛がられてろ。」

「ニヤ、ニヤんですとおー！」

リコは今日一番の声を上げて驚愕する。なんせリコは可愛がられる事が苦手なのだ。

構われるのが嫌なのでは無く男なのに『可愛い可愛い』といわれ『リコちゃん』とちゃん付けで呼ばれる事に抵抗感があるのだ。どうせなら『かっこいい』と言われた方が嬉しいのは男子心と言うものだろう。

「そんなに時間もかからねえよ。いつも通りの報告だから10分ぐらいだよ。」

リコは自分たちアイルーが人間たちの琴線に触れる事にはある程度理解を示している。だからこそ10分も可愛がられると思うと辟易し、苦情を言おうとした時だった。

「エイナさあーん！アイズ・ヴァレンシユタインさんの情報を教えてくださいー！」

「あ？」

「ニャア!？」

そんなもの何処かに消え失せた。なんせ隣を血塗れの少年が満面の笑みで通り過ぎて行つたのだ、軽くホラーものである。

「ニャ、ニャニャ!!」

「落ち着けリコ、名前叫んでたしエイナちゃんが担当の駈け出してとこだろうぜ。怪我も殆ど無かつたし、ありや返り血かななかだろ。ほいミイシャちゃん、リコの事頼むわ。」

「は〜いリコちゃん久しぶり♡相変わらず可愛いね！」

「うニャー！旦那さん後で覚えてろニャアア!!」

☆報告後

冒険者ギルドのギルド長ロイマンへ適当に報告を済ませた後リコを引き取りにミイシャを捜していた。因みにロイマンから嫌味つたらしく壁の事を言われたがそれも適当に聞き流していた。

そして目的の人物であるミイシャ・フロットを見つけたが彼女は泣く泣く書類の処理をしており近くにリコは見当たらなかった。

「おうミイシャちゃん、リコはどうしたんだ？前の時はメチャクチャ撫でてたろ？」

「ディビッドさくん聞いてくださいよ！エイナがリコちゃん愛でるのは溜まってる仕事が終わってから言うのよ！」プンプン

そう言っって頬を膨らませる彼女に対して「いや、それは当たり前だろ」と思ったが口には出さなかった。となるとリコは何処に行ったのか？

「それじゃありコはエイナちゃんの所に？」

「そうだよ、ほらあそこ。」

そういつてミイシャの指差す方向を見るとエイナが先の少年と対面になるようにソファアー座り説教をしているのが見えた。

（美人は何しても美人だけど怒り顔は別だな。すげえ怖い、てか貫禄あるな。激昂ラー

ジャンよりあるんじゃないかね？まあその手にリコを抱いて撫でてなかったらの話だけだな。）

などと割りときれいな事を考えたが確かに今のエイナはリコを撫でている事で一周回って微笑ましく見えた。

「おお居た居た、序でに聞くけどあの説教食らってる少年の名前って分かるか？」

「えつと、確か「ベル・クラネル」って言ったかな。彼がどうかしたの？」

「いんや、さつきまで血塗れだったから少し気になっただけ。それじゃリコ回収してさつきと帰るわ、またなミイシヤちゃん。」

別れを告げるとリコを回収する為エイナ達の方へ向かうデイビッド。説教中に外部の者が割り込むのはマナー違反だが仕方ないだろう。

それに

（「クラネル」ねえ、どつかで聞いた様な気がするが気のせいかな？それにしても白髪に赤目、ウサギみたいな子だな。かくも血塗れウルクスかな…てか？）

少しだけベル・クラネルという少年のクラネル名に一瞬引つかかったが気にしない事にしてリコを引き取る為に近づいた。

「ようエイナちゃんG級ハンターと少年、お話中悪いがリコを引き取ってもいいかい？」

これがG級ハンターと後の世界最速兎との初対面だった。

たんと食え『豊穰の女主人』

前回から明けて翌日、今日はクエストが届いていなかった為自宅で過ごしているデイビッドとリコ。そんな二人は喧嘩の最中、正確に言えばリコがデイビッドに一方的にむくれているだけなのだが。

発端は昨日のミイシャ、エイナに預けられた事であり我慢して撫でられていた事の鬱憤を拗ねるといふ形でデイビッドにぶつけているのだった。リコの目の前で説教をされていたベル・クラネルからは

「デイビッドが引き取りに来るまでずっと普通のネコだと思われていた。その事も手伝つて更に機嫌が悪くなっている始末、女心も面倒くさいがこういう男心も面倒だと感じたデイビッドであった。」

「なありコ、悪かったよ。そろそろ機嫌直してくれて、マタタビやるからさ。」

「旦那さんにボクの気持ちなつて分からないニヤ！あとマタタビで許すと思つたら大間違いだニヤー！」

「…その割に受け取るのな。」

まあこんなやり取りをしているが二人は数年来の相棒同士であり、リコもある程度許

しており今は形だけ拗ねているだけだ。

つまりデイビッドも気付いており暗に「何か他の見返りをよこせ」と言っている事に苦笑している。

「分かった分かった、最近顔出せてなかったし今日は『豊穰の女主人』にでも行くか？ついでにマタタビ料理でm」「まったくしょうがないニヤ〜！旦那さんの顔を立てて許してあげるニヤよ！」「早えよ、機嫌直すの……。」

と言う感じでほぼ毎回喧嘩をすればこういう形でケリが付く二人なのだった。

実際リコも『豊穰の女主人』はお気に入りなのだ。最初訪れたときに店主にもついていたマタタビで料理を作ってもらってからオラリオにある飲食店の中でもよく行く店になったのだ。おまけに可愛らしいキャットピープルのウエイトレスも居り言う事なしと来た。

「俺も気に入ってるけどリコは本当に好きだな、あの店。」

「旦那さんもネコの事言えないニヤ。ミアさんに知り合いの商人紹介して食材卸して貰ってるニヤ。」

「まあな、ミアさんにも珍しい食材扱ってる商人が居るって言ったら頼まれたんだよ。ついで儲かったら俺らの料理の量増やしてくれるって言ってたし。酒も美味いしな。」

今夜にでも行くことにし、デイビッドは元々あった予定の為に外出、リコは留守番す

る事にした。

《加工屋》

「毎回すまねえな、おやつさん武具の整備頼んじまつてさ。」

「なあに構いやしねえさ！それで金もらつてるんだ、職人としてキツチリ仕事させてもらつたぜ。それにお前さんが武具の整備が苦手なのは昔っからだしな。」

「簡単な整備は出来るんだけどな。定期的なメンテになるとどうにもな。」

此処はドンドルマからの出張《加工屋》オラリオ店。デイビッドが赴任する時に同様に移動して来た《加工屋》で店主もデイビッドが駆け出しハンターの頃からの顔なじみである。

主に武具の販売・作成・強化などを請け負っている。しかし依頼は全てハンターのみである為客もデイビッドのみである。

デイビッドが依頼していたのは太刀〔鎧裂鎌ドヒキサキ〕の整備。鎌の様な見た目の太刀であり恐るべき切れ味を持つ鎌蟹シウグングザミ、その二つ名個体である鎧裂シウグングザミの素材から作られている武器だ。以前連続で何度も担いだ為に加工屋へと整備依頼したのである。

「流石に二つ名の武器だけあって癖はあつてもそこまで損傷は多く無かつたぜ。ある程

度傷んでた部分は預かった素材で直しといたよ。二つ名武器をここまで傷めるなんて最近モンスターの数が増えて来たよな。」

「ギルドと調査チームの報告によると本能的に異物として排除対象としているダンジョンのモンスターを感知して近づいてくるのかもしれないってのあったな。先月なんざ大型だけなら19頭も来たからな、その内他のハンターも寄越すかもしれないって言われたよ。」

「そうか、まあお前さんらの事だから心配しちやいないが…… 氣い付けろよ?」

「大丈夫さ、何たって俺とリコは数年来の相棒だぜ?俺が出来ない事はリコが、リコが出来ない事は俺がつて支え合ってきたんだ。くたばる氣は早々ないよ。じゃあまたな、おやっさん。」

加工屋の店主と別れると帰宅するデイビッド、しかし夕餉までまだ少し時間がある為如何したものか悩んでいた。すると視界に知り合いの姿が数人映った。そうこうしていると同様こちらに氣付き近寄って来た。

「あれ?デイビッドじゃーん!久しぶりだね。」

「久しぶりね。」

「……」コクッ

「お久しぶりです。」

「よおテイオナ、それにテイオネ、アイズ、レフイーヤ。昨日遠征から帰って来たんだってな、お疲れさん。」

デイビットの知り合い、それはロキ・ファミリア所属のアマゾネスのヒリュテ姉妹に劍姫ことアイズ、エルフのレフイーヤだ。

数年前に紆余曲折あって現在は知人・友人と呼べる程度になったファミリアの一つだ。街中の酒場で時折主神ロキ、ガレス、デイビットで一緒の呑んでいる姿が目撃される程度には仲が良いといえる。

実際デイビットはロキ・ファミリアに限らず実力者の居るいくつかのファミリアから一目置かれてい存在である。オラリオでは珍しい「モンスターハンター」かつ神の恩恵なしに第一級冒険者と渡り合えるとされる実力、外からくるモンスター達の珍しい話などが主な原因なのだ。

「数週間ぶりってところね。私達がない間何かあった？」

「特に無かったな。強いて言えばモンスターが近寄ってきた事によるクエストがあったくらいだ。」

聞けば向こうもテイオナとアイズが武器の整備依頼に行っていたらしく、その場で雑談する。特にテイオナは武器を一から作り直してもらったなど苦笑もの話題もあった。一級冒険者の扱う武具などはハンターたちの武具と遜色ない値段・手間暇

が掛かる為職人たちに少し同情したデイビッドであった。

「つと悪い、この後リコと一緒に『豊穰の女主人』で飯食う事になってんだ。」

「そうなの？ 私達もこの後そこで遠征の打上げするのよ。」

「それならまた後で会うかもな、それじゃロキにも宜しく言つといてくれ。」

後で落ち合うかもしれないと言つて別れると帰宅しリコと共に目的の酒場へと赴くのだった。

《豊穰の女主人》

「それでロキ・ファミリアの人達と会う事になったんだニヤ？」

「ああ、と言つても一緒に呑むかは分からねえよ？ 向こうだつて遠征の打上げなんだし積もる話もあるつてもんだろ。」

あの後酒場『豊穰の女主人』に来て案内された席でデイビッドはリコに先程あつた事を報告していると店主のミアがやって来た。

「いらつしやいお二人さん、最近顔見せなかつたじゃないか。今日はその分食べて行つてくれるんだろう？」

「ああ、こんばんはミアさん。悪いね、最近忙しかつたんだよ。取り敢えず俺はベルナスのウオツカ蒸しに竜の合挽きハンバーグ、リモホロ・ミックスグリルとポツカウオツカ

ね。」

「ボクはマタタビのいつものと発砲ミルクでお願いしますニヤ。」

「あいよ、出来るまで暫く待つてな。それとリコ今日は忙しいからアーニヤとクロエは貸してやれないからね。」ニヤニヤ

そう言うときミアは厨房の方へと消えていく。先程のミアの言う通りウエイトレス達はパタパタと忙しそうにしていた。リコはリコで少しがっくりしていたが酒を持ってきたアーニヤと一言二言交わし頭を撫でられると途端にデレデレしはじめ機嫌が良くなった。デイビッドや他の者では不機嫌になるのにこの二人では真逆の反応をすることに相変わらずだなと苦笑する。

乾杯し吞んでいると料理が届いたので舌鼓を打っている。

そこでロキ・ファミアが入店して来たのが見えた。オラリオの二大派閥とされる片方の幹部陣含めた高レベル冒険者が会している為元からいた他の客はおっかなびつきりしている。向こうは向こうで主神ロキが乾杯の音頭を取り宴を始める。

「ロキ・ファミアの人達来たニヤよ旦那さん。あつ手振つてるニヤよ、どうするニヤ？」

「取り敢えず行くぞ、飯は食ったし酒持つて行くぜ。」

二人が酒を持ってロキ・ファミアの面々は個人差はあれど邪険にする者はいなかつ

た。そして主神であるロキが迎え入れる。

「おおうデイビッドにリコたん同じとこで夕餉やなんて奇遇やなあ〜！」

「こちらこそなロキ、それより良いのか？俺達こつち来ても。」

「此処来る前に皆ええ言うてたし構へんよ。久々にウチとガレスと一緒に飲み比べしようやー！」

「おお！それは良いわい、デイビッドよ今度こそ決着と行こうではないか！」

「別に構わねえぞ、だがなロキ ガレス俺は既に5杯目だぞ？これでまた引き分けになつたら今回は俺の勝ちだな。」

「ほう面白い事を言うではないか、じゃが今回勝たせてもらうのは儂じゃぞ。」

「二人だけで盛り上がって貰ったら困るわ、今回はウチが勝つでえー！」

「「勝負!!」」

と云つて飲み比べを始める3人にリコとロキ・ファミリアの団長フィンと副団長のリヴェリアはまたかと苦笑する。何故ならこの3人が揃うと決まって飲み比べを始める、そして大体最初にロキが潰れてデイビッドとガレスが引き分けるといった具合に幕引きになる。しかし酷い時では店の酒を飲み尽くし暫し出禁を食らった事がある為辟易していた。そんな中リヴェリアがリコに声を掛ける。

「全く、困った仲間を持つとお互い大変だな。酒は楽しむ分には良いが程々にして欲し

いものだよ。」

「全くだニヤ、リヴェリアさん。でもらしいっちゃらしいニヤ、ボクは旦那さんが禁酒するとか言い出したらまず本物が疑うくらいだニヤ。」

仲間に向けて割りと辛らつな会話を続ける2人にフィンはそれはそれでと苦笑する。そこでふとフィンは此処に来る前にテイオネが言っていた事を思い出すとデイビッドに話し掛けた。

「ねえデイビッド、僕たちが遠征に行っている間にまたモンスターが来たんだよね。良ければ話してくれないかな？ダンジョンのなら兎も角、地上のモンスターはあまり馴染みが無いからね。」

「おお！それはええわい、酒の肴に聞かせい。」

フィンの提案を皮切りにロキや他の団員達も聞かせてくれと言ってくる。更に周りにいる客たちも興味を向けてきている。

確かにこういう時でも無い限りあまり話さない事だと考え丁度良いと思ひ話始める。

「よし！良いぜそれならフィン達が遠征に向かつてから最初にやって来たモンスターの話をしよう。そいつの名前はデイノバルドって言つてな別名斬竜なんて呼ばれて尻尾に鋭利な刃を……」

□

□

□ □

□ □ □

□ □ □ □ □

「・・・それでそのアルセルタス亜種は引っこ抜いた後さつきと捕獲して元の生息地に送り返したのさ。それじゃ俺ちよつとトイレ言ってくるわ。」

「・・・今の話ほどモンスターに生まれなくて良かったと感じた事無かつたつす。」

「そうだね、アルセルタスっていうモンスターはメスにとつては武器兼非常食みたいな存在でもある・・・という事かな。」

ロキ・ファミアリアや周りにいる客たちに遠征中に襲来したモンスター達の事を聞かせると一端ディビッドはトイレに向かった。それから店内の男性陣は最後のアルセルタスに対して個人差はあれど男として同情していた。

因みにリコは途中で眠ってしまいリヴェリアの膝の上で丸くなっており女性陣はリコとリヴェリア両方に羨ましい視線を向けていた。

それから暫くしてディビッドがトイレから戻ると店内は先程より喧噪にあふれており、ロキ・ファミアリアのベート・ローガが吊るされておりお仕置きを食らっていた。

「俺がトイレに行っている間に何がどうしてこうなったんだ？」

「ん？ デイビッドか。 いやなに、 かいつまんで話せばベート馬鹿がよつた勢いでアイズにセクハラをしてな。」

「成程な理解した。 アイツ明日絶対今日の事覚えてるパターンだな、 まあ自業自得なんだろうけど。」

「良い薬だ。 ああそれと今日の話は中々興味深かったよ、 世界をあまり知らない私からしたら不思議で面白かった。 またいつかお前達ハンターの世界の事も話してくれないか？」

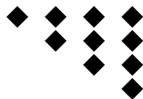
「別に構わんがりヴェリアから言ってくるなんて珍しいな。 喜んでもらえたのなら良かったがな。」

「私だけではないさ。 他の者たち、 特にティオナなんか目を輝かせて聞いていたよ。 ああいう話はオラリオの外にそこまで行かない我々だからこそ尚更さ。」

「そういうもんか。 つとそろそろ良い時間帯だな、 そろそろ帰るよ。」

「ん、 分かった。 気を付けて帰れよ。 それと酒は程々にしておいた方が良いでしょう。」

そういう事言うからロキからママって言われるんだぞと内心思っているとリヴェリアから睨まれたため急いでリコを連れロキ・ファミリアのの面々に挨拶して支払いを済ませ帰路に就くデイビッドなのであった。



『こちら古龍観測隊よりハンターズギルドへ』

報告します。

兼ねてより各地を転々としていた鋼龍クシャルダオラがフラヒヤ山脈へ向かってい
る途中急激に進路を変更した事を確認しました。

更にこの個体は脱皮直前の錆びた個体であり非常に凶暴性が高くなっています。

このままの進路で進み続けると途中に氷海があります。が延長線上に迷宮都市オラリ
才存在します。仮に辿り着いた場合甚大な被害を齎す可能性があります。

報告を終了します。

『こちらハンターズギルドより古龍観測隊へ』

了解しました。

報告書に記載された個体のデータを確認しました。

データよりこの個体はG級モンスターであると断定。

未だ氷海に留まる可能性もある為引き続き観測を続けて下さい。氷海を通過した場合ただちに新たな報告をお願いします。

氷海を通過した場合はオラリオ周辺に対して緊急避難勧告の発令を検討及び、迷宮都市オラリオ駐在G級ハンター デイビッド・フィリップス氏に対して討伐または撃退の緊急クエストを発令します。